

# フランスにおけるリカード経済学研究

—ユゲット・ビオジョ (Huguette Biaugeaud) と  
「貨幣論的接近 (Approche monétaire)」の研究を中心に—

竹 永 進

## はじめに

フランスでのリカードの経済学についての研究は、広い意味ではすでにリカードと同時代の J.B. セーによる『経済学および課税の原理』(以下『原理』と略称)のコンスタンシオの仏訳への詳細な注解<sup>1</sup>から始まる長い歴史を持つとあってよい。しかし、リカードが経済学史的な研究の対象となる 19 世紀の中葉(その嚆矢は MacCulloch, J. R., *The literature of political economy: a classical catalogue of select publications in the different departments of that science*, London, 1845 であろう)から後半以降、リカード経済学発祥の地であるイギリスと比べると(Jevons や Marshall そして J.Hollander や Cannan の後代にまで大きな影響を残した研究を挙げれば十分であろう)、フランスでリカードの経済学が本格的な検討の対象とされた例はあまり多くなかった<sup>2</sup>。日本の学界でもフランスにおけるリカード経済学研究についてはほとんど知られていないが、そもそもフランスの学問世界自体でリカードの書いたものに多くの注意が払われてこなかったし、また、リカード受容・研究のための基礎条件をなすりカードの英語の著作物のフランス語への翻訳も満足に行われていなかった<sup>3</sup>という事情がある。フランスに比べ

<sup>1</sup> セーによるこの注解はリカードの『原理』のフランス語新訳(その意義については後述。関連文献目録の Ricardo, 1992)の巻末にその主要部分が収録され、現在では日本の研究者にとっても比較的容易に利用可能になっている。逆にリカードからのセーへの対応の詳細については、佐藤滋正『リカードウ価格論の研究』(八千代出版、2006 年刊)の第 2 編「資本蓄積の理論」第 3 章「リカードウによるセイの評価」を参照。本書とほぼ同時に刊行されたセーの *Traité d'économie politique* の集注版(Jean-Baptiste Say, *Oeuvres complètes : Traité d'économie politique*, en 2 volumes, Economica, Paris, 2006)は当然参照されていないが、佐藤著当該章は筆者の知る限り、今のところリカード研究という枠組みからするリカードとセーの経済理論上の関係についてのもっとも詳細な研究である。

<sup>2</sup> 日本の学界でも以前から知られる Charles Rist, *Histoire des doctrines relatives au crédit et à la monnaie, depuis John Law jusqu'à nos jours*, Paris, Sirey, 1938 (シャルル・リスト著『貨幣・信用学説史』、天沼紳一郎訳、実業之日本社、1943 年)におけるリカードの貨幣・信用理論の紹介と検討は、むしろ例外的な存在であろう。しかし、本書は経済学史の研究書であるとはいえ表題にも示されるような一定の限定された視角からのものであり、リカードについての扱いも H. ソートンとの関連や地金論争へのリカードのかかわりといった特定の論点についての論及を含むのみで、リカード経済学の本体である主著『原理』の主要内容にはほとんど目配りがなされていない。

<sup>3</sup> しかしこのことは、フランスの経済学の世界がイギリスの経済学に対して一般に無関心であったとか、イギリスの経済学文献の受容に消極的であったということを意味しない。18 世紀末から 19 世紀にかけてイギリスの経済学文献は多数フランス語に翻訳されており、英語を十分に習得していなかった青年時代のマルクスは 1840 年代の前半に経済学研究を始めた当初、イギリスの経済学をこれらのフランス語訳によって読み抜粋を作成している。1844 年にパリ滞在中に書かれた『経済学・哲学草稿』に登場するイギリスの文献はスミスやリカードや J. ミルの経済学上の主著も含めてフランス語訳によっている。ベンサムと同年代でリカードとも交流のあったジュネーヴ出身のデュモン (Pierre Etienne Louis Dumont, 1759-1829) は、この時期に編集者・出版オーガナイザーと

ると一世紀も遅れてリカードの研究が本格的に始まった日本では、すでに今から 30 年以上も前にスラッフアによる『全集』の日本語版が完成している（ただし原語版も日本語版も大幅に遅れた総索引を含む第 11 巻は除く）ことを思うと、これは驚くべきことといえるかもしれない。

本稿は、以上のような日本でもあまり知られることなく、しかもそもそも本国でもあまり盛んとも言えなかったフランスにおけるリカード経済学の研究について、リカード研究文献の枚挙に暇のない英語圏や日本の研究に対して独自性を有すると思われる若干の例を取り上げて紹介し、筆者自身が行ってきたリカード研究の視点から多少の検討と評価を加えてみることを趣旨とする。

以下に取り上げるのは、20 世紀の前半に『原理』の各版の比較検討を通してリカードの価値論の独自の性格付けを試みたユゲット・ビオジョの研究と、70 年代後半以来叢書や雑誌の企画・刊行の活動を続けている Carlo Benetti, Jean Cartelier, Ghislain Deleplace の 3 人を中心とする「貨幣論的接近」（彼ら自身の自称）による理論的・学説史的研究を背景とした、彼らとその関係者による 90 年代のリカード研究である。前者がもっぱら『原理』を中心としたいわば文献解釈的な価値論のみを対象とした研究であるのに対して、後者はこのようなりカード研究が伝統的に研究の焦点としてきた分野から、リカードにおける価値論と貨幣論との関連、とりわけ、価値論とは区別されるその貨幣論の特質の解明に研究の中心を移している。いずれもそれぞれ異なった意味で他には見られないユニークさをもった研究として、リカード研究史上にその存在を主張しうると考えられる。

これらの研究の紹介と検討に入る前に、最初に触れた『原理』の原典とほぼ同時期のコンスタンシオによる翻訳刊行から現在にいたるまでの、フランスにおける『原理』およびその他のリカードの著作物のフランス語訳の刊行状況について、『原理』の最近の新訳書に付された解説を参考に大まかな紹介をしておきたい。

『原理』の最初の仏訳者であるコンスタンシオ (Constancio) は 1777 年生まれで本職は医者であり外交官であった。リカードの『原理』の訳本は初版 (1817 年) を底本として 1819 年にパリの J.-P. Aillaud という出版社から刊行された。コンスタンシオはリカードの『原理』のみならず、マルサスの『経済学原理』(1820 年) の翻訳 (同じ版元から 1820 年刊) やマルサスが『人口の原理』で批判対象としたゴドウィンの『人口論』の翻訳 (同、1821 年) もしている。リカードの『原理』の仏訳は 1835 年に再刊されている。このときはパリの同じ出版社とブリュッセルの Dumont (注 3 を参照) から刊行された。リカードの仏語訳『原理』はその後多数の関連書籍の出版実績のある Guillaumin から 1847 年に出版された。このときには『原理』単独ではなく、*Collection des principaux économistes* の第十三巻として『リカード全集』と銘打たれた一冊本の形で刊行された。この『全集』に実際に収録された『原理』以外のリカードの著作物は、『地金の高い価格』(1810 年)、『ボウズンキト氏への回答』(1811 年)、『穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論』(1815 年)、『経済的で安定的な通貨のための提案』(1816

して活躍し、イギリスの経済思想のフランス (スイス) への導入に大きな役割を演じた (デュモンと彼の同時代の知識人たちのこうした活動については、文献目録に掲げた喜多見洋の論文をはじめ彼の一連の仕事を参照)。彼らの仕事は、その結果の一つとして、初期のマルクスの経済学研究にも、従ってこの時代の彼の思想形成にも、貢献したともいえるであろう。

年)であった。このうち『原理』の訳文は、前年の1846年に没したコンスタンシオの以前の訳文に若手の Alcide Fonteyraud という人物が、手入れをするるとともに『原理』の第3版(1821年)での修正・拡大を取り入れたものである。さらに19世紀の末(スラッフアが『全集』第X巻『伝記および大陸旅行』で報じているところによれば1888年)に、『原理』の新訳が第三版のダイジェスト版として刊行されたが、これは全32章のうちの数章を含むだけのきわめて不完全なものであった。

20世紀に入って、マルクスとエンゲルスおよびマルクス主義関係の多数の書籍を1920-30年代に翻訳刊行していた Costes から、リカードの『原理』の新たな仏訳が1933-34年に2巻本として出版された。19世紀末以来の権威ある版本とされていた Gonner 版を底本としたとされる。また、最近までフランス国内で実際に流通し使用されていた『原理』のフランス語版は、Christian Schmidt の序文を付したもの(Calman-Lévy 刊1970年)と Pierre Dockès の序文を付したもの(Flammarion 刊1971年)の二種類であるが、いずれも独自の訳ではなく上記の古い訳文をそのまま使用している。

19世紀中葉以後の『原理』の以上の諸訳書は、実はすべてが最初のコンスタンシオの訳文をほとんどそのままの形で流用していた。これらのどの版でも、コンスタンシオ訳に含まれていた誤訳や印刷上のミスがそのまま再現されている。「Aillaud 刊の Constancio 版は、当時としては高い質のものであったとはいえ、実際は不正確な訳や誤訳を含んでおり、若干の主要命題や副次的命題の見落としがあり、リカードの原文の若干の複雑なあるいは曖昧な箇所は不明確な仕方で定式化されたりいい加減に要約されたりしている。」(Ricardo1992,p.10)日本の研究者にとって、つい最近までフランスで実際に利用されていたリカードの著『原理』のフランス語版がこのようなものであったというのは、驚くべきことである。『原理』に限らず一般にリカードの著作のフランス語による出版の状況について、Béraud は比較的最近の論考で次のように述べている。「リカードの著作の参照されるべき版本はスラッフアのそれである。フランス語訳はあまり出来がよくなく、その使用は避けるほうがよい。」(Béraud1992, p.504) こういうわけで長い間『原理』およびその他のリカードの著作の信頼しうる新訳が待たれていたのである。

上の Béraud の論考を含む *Nouvelle histoire de la pensée économique, 1.* (全三巻からなるこの企画は第一巻刊行から8年後の2000年に完結している。本書については筆者による書評——『経済学史学会年報』第42号、2002年、pp.143-146。——を参照されたい。)と同年に、『原理』のフランス語新訳が、長らく実質上のコンスタンシオ訳を出していた上記の Flammarion から、これに取って代わるべきものとして刊行された。両者の相互参照の状況から見て、この新訳書は Béraud の上の発言を含む論考を掲載する *Nouvelle histoire...* 以後に刊行されたものと思われる。したがって Béraud の発言はこの新訳をも念頭に置いた上でのものではないであろう。

この新訳書の表題には原理第三版の仏訳と銘打たれている。しかし、1821年刊の第三版そのものを底本とするのではなく、スラッフアによる全集版第一巻のテキストから翻訳がなされている。ただし、(特に第一章にかんして)スラッフア版に付されている初版・第二版との対照のための詳細にわたる資料はまったく採録されていない。このように厳密な学術的翻訳書としては不

備はあるものの、上にざっと紹介したそれ以前のものに比べればこの新訳は格段の改善といってよいかもしれない。この新訳では、原文が長い文章であれば多少分かりにくくてもそのまま長いフランス文に移しかえるなど、フランス語の構成法が許す限り英語の原文に忠実に従うという方針が採られている。この新訳が日本の研究者にとっても有用でありうる点は、19世紀のコンスタンシオの仏訳本にセーが付した評注の大部分が巻末に付録として収録されており、各評注の付された箇所が本文中に逐一示されていることである。この資料を使えば、セーのリカードへのコメントと『原理』の対象箇所との対照を同じフランス語によって行える、というユニークな利点が読者に提供される。

なお、『原理』以外のリカードの経済学関係書で比較的最近仏訳刊行されたものは、刊行順に遺稿「絶対価値と交換価値」(1974年)、『利潤論』(1988年)、『貨幣論論集』(リカードの貨幣問題を扱った論著を集めたもの、1991年)の3点であるが、それぞれ訳者も版元も異なり統一した方針の下に出版されたものではない(これらについての詳細は本稿末の参考文献目録を参照されたい)。以上の4点によっても、「価値と分配の理論」と「貨幣の理論」というリカード経済学の大きな二つの領域にかかわる主要な文献はカバーされているといえるかもしれない。しかし、「マルサス評注」を始めとする草稿やノート類、議会証言、それにリカード経済学研究に不可欠の大量の書簡はこれら4点には含まれていない。つまり、分量的にはスラッフアの『全集』の大半を占めるリカードの著作物が、まだフランス語に翻訳されていないのである。たしかに、すでにこの『全集』が完訳されている日本語と英語の距離に比べれば、英語とフランス語の距離ははるかに小さく、その分だけ、研究者の用に供するという目的のための翻訳の必要性は小さいということがいえるかも知れない。しかし原語とはことなる言語で思考したり書いたり議論をしたりするためには、その言語でリカードのキー概念や思想を表現する共通の語彙が必要であろう。この点からすれば、たとえ距離の小さい言語間であっても、良質の翻訳は他言語での研究と討論のための基礎的な条件の一つをなすであろう。だとすれば、日本語の場合と同列の判断はできないにせよ、フランスにおけるリカードの著作物の翻訳・刊行の現在までの状況には、まだかなりの遅れがあるといってもよいように思われる。

## 一. ユゲット・ビオジョのリカード価値論の研究

現在の日本(だけでなく他の諸国)の研究者がビオジョの名前とその著書(本稿末の参考文献目録を参照)を目にし、場合によっては注意をとめる可能性が多少あるとすれば、スラッフアが彼の編集になる『リカード全集』第1巻の『原理』の序文の中の、J.H.HollanderやE.Cannanが19世紀末から20世紀初頭に表明した影響力ある有力な見解(リカードは『原理』の初版から第二・第三版へと進むにつれて当初主張していた投下労働価値説を後退させた)について言及した箇所に付した注(p.xxxviii,note1)で、これと「対立する一風変わった見解」を提起したとして書名と著者名を挙げていることによってであろう。20世紀のフランスのリカード研究書が『全集』でスラッフアによって取り上げられている例は唯一この書のみであり、またこの一箇

所だけである。スラッフアのものの書き方にもよるのであろうが、よほど注意して読むかあるいはこの研究書をあらかじめ知っていなければ、読んだものの記憶に残ったり、あるいは、この注によって本書を紐解いてみようとするのは、きわめてまれであろう。実際、1934年に前年に提出された学位論文を元にパリで公刊されたビオジョの本は、英語圏ではスラッフア以外には、Stigler や Blaug によっても 1950-60年代から言及された例が少数あるのみであるが、本書へのフランスでの言及はやっと 80年代に入ってからのことである。なお、スラッフアが彼の『全集』第一巻への序文というきわめて重要な文書の中でごく簡単にであるとはいえこの本に言及したのは、ビオジョが学位論文のための研究過程でスラッフアと交流を持ったこと、および、スラッフアが彼女の研究を評価しその結論的主張の一部に賛同したからであろう（彼女の著書の巻末の文献目録のリカードの著作物の項にはスラッフア編のリカードの著作集が「準備中」として紹介されている<sup>4</sup>）。Abraham-Froid は、「フランスでの言及の少なさの一因は、そもそもリカード自体がよく読まれていなかったことにある」（ibid., p.vi）と言うが、筆者にはこれ以外にも、以下に紹介するようなビオジョの著書の研究スタイル自体がフランスの経済学（史）研究の世界になじまない面を持っていたことも、別の一因をなすのではないかと思われる。特に、次の項目で取り上げる「貨幣論的接近」ないしその周辺の論者たちのリカード研究を見れば、この点は納得されるであろう。

しかし、1980年代に入ると、学位論文を元にした Paul Vidonne の 1986年の著書や、先ほど名前を挙げた Alain Béraud の学会報告(1985年)、および彼の 1992年の論文でもビオジョの著書は検討に付され高く評価されている。とりわけ、Béraud 1992 はリカード研究のための文献解題の部分で次のように述べている。「最近再刊された H. ビオジョの学位論文はフランス語では最良の参考文献である。」(ibid., p.504)「最近再刊」されたというのは Biaujeaud 1988 のことである。Abraham-Froid による再刊の企画も、80年代に入ってからフランスの学界内でのこのような（小さな）動きを前提としているように思われる<sup>5</sup>。特に Vidonne は学位論文を Abraham-Froid が教授を務めていた（現在はすでに定年退職しているとのこと）パリ第十大学（ナンテール）に提出しており、この再刊は Vidonne の研究と関係があるのかもしれない。

内容紹介に入る前に本書の目次を訳出しておく（1988年版による）。この目次には各章の概要を示す短い説明文が付されているので、これを読めば本書全体の内容について概要把握が可能であろう。

はしがき.....	1
序論	

価値論研究のおもしろさ。なぜリカードと彼の時代そして彼の周辺を選んだか。彼の哲学、彼の改宗の真実の意味、科学研究に対する関心。アダム・スミスの影響。――主題の現代性と制限。

4 以上の英仏での言及のデータは Biaujeaud 1988 に付された編者 Abraham-Froid の *Avant-propos*, p.v による。  
5 この再刊版は刊行当時存命していた著者が最初の版に含まれる校正ミスやその他の技術的な改訂を施しただけで、1934年の版と中身はまったく同じである。cf. do., *Avant-propos*, p.v. 筆者が直接参照したのもこの再刊版のみである。

研究計画 .....	1
------------	---

## 第一部 価値の概念

### 第I章。——価値と労働。——価値の客観的性質

リカードの初期の著作、生産の困難あるいは生産費用。——小麦の低価格についての試論、支出労働の例外的な出現、希少性。——アダム・スミスの理論。——『原理』初版：価値の規制者としての支出労働、リカードの議論の論理的不十分さ。——価値の普遍的規制者としての支出労働、資本の蓄積、土地の占有、地代。——価値の規制者としての支出労働のアプリオリな性格..... 32

### 第II章。——価値と資本——利潤と価格

資本蓄積は価値が労働の総量によって規制されるという最初の規則に修正を加えない。——固定資本と流動資本：最初の規則がかなり修正される、生産費価値論、——この矛盾の説明、利潤論、農業恐慌と穀物法、地代、自由貿易と価格の低下、分配論..... 55

### 第III章。——価値尺度について

価値尺度としての支出労働。——間接的尺度。——直接的尺度：標準労働、その不完全さ。——地金論争の影響。——標準としての金。——二つの標準の役割..... 75

### 結論

リカードの進化の第一局面の性格、不完全でアプリオリな理論：概念。命題..... 84

## 第二部 価値論

### 第I章。——リカードの進化の源泉

リカードの不満。——批判：マルサス、トレンズ、マカロック..... 90

### 第II章。——価値論という概念について。——価値と労働

価値が支出労働によって規制されるという規則の証明。——価値《理論》。——リカードの方法。——帰納：不完全なあるいは仮説的な観察、現象の恒常的性格の探求。——演繹：基本原理、形態、ジェームズ・ミルの影響..... 98

### 第III章。——資本。——価値と生産費

蓄積労働としての資本。——蓄積のためにまた蓄積の後に資本により規制される価値、マカロックの影響。——時間、価値の第二の原因、利潤の蓄積、加工過程の継続時間、利潤率の単一性、ほとんど重要性のない原因、トレンズの影響。——生産費と需要、需要に対する費用の優位、競争と利潤率の単一性、農産物への拡張、マルサスとの論争..... 114

### 第IV章。——価値尺度について

支出労働の価値尺度としての不十分さ。——時間の影響。——相対価値の規制者としての労働、——その役割の漸進的制限、価値の標準としての金。——標準の理論。——不換紙幣流通の終焉——金の相対的不変性..... 137

### 結論。——まとめ

生産費価値説の漸進的完成。——労働価値論の分化と吸収。——分配論の歴史的形成。——リカードの産業主義..... 153

### 第三部 リカード労働価値説の批判と重要性

#### 第 I 章。——リカード諸理論の矛盾点と不十分な点

希少な物と再生産可能な物の間の区別の不明確さ、需要と時間の役割。価値の基礎としての労働、代替案、利潤の重要性。——価値の基礎または尺度としての労働。——価値を尺度する労働の量。——生産費と分配、悪循環。

労働価値論と生産費価値論の不正確さ。——これらの理論の正しい部分。——差額地代 162

#### 第 II 章。——リカード理論のおもしろさ

リカードの理論の重要性、イギリス学派、社会主義。——科学的な興味：方法、社会決定論：スミスとリカードの理論の誕生の条件、功利主義道徳、大工業の発展、前社会学的運動。フランス学派 ..... 184

#### 結論

リカードの失敗の哲学的なおもしろさ..... 195

付録。リカードの書簡 ..... 197

文献目録 ..... 231

この目次の最後から 2 番目の項目に示されているように、本書の末尾には 19 世紀以来本書の執筆・刊行までにセーの末裔や Bonar, J.H.Hollander などによって種々の形で公表されたりカードの書簡集<sup>6</sup>を元に、著者自身の仏訳によるリカードの手紙が収められている。1819 年から 23 年のリカード没直前までのほとんどマカロックとマルサスに宛てた手紙、特に 23 年 5 月以降のものが多数を占める。この時期、リカードはマルサスとは直前に出版された彼の『価値尺度論』をめぐって、またマカロックとは彼自身の『原理』第三版での重要改訂点とりわけ価値修正論とこの問題と深く関連する労働概念とをめぐって、書簡による激しい議論を行っていた。ビオジョはこれらの書簡を自己の主張を補強する資料として巻末に仏訳し添付したのである。今から見れば部分的・断片的であるとはいえ、これが現在に至るまで、リカードの手紙がフランス語でしかも一定の理論的コンテクストにおいて紹介された唯一のものである。ただし、この書簡集はリカードの手紙のみで彼の文通相手からのものは含まれていない。この点ではリカードの発言は一面的にしか理解されないであろう。また、本書刊行当時はすでにスラッフアの『全集』企画がスタートしており、基礎資料収集の一環としてこのような書簡類のうち未公刊であったものもすでにいくらかはスラッフアの手許に集められていた可能性があるが、スラッフアと交流のあったビオジョがこれらの未公刊の手紙の提供を受けたかどうかはつきりしない。少なくとも文献目録中の「書簡」の項にはこのようなことは明記されていない。

さて、以上の表題・目次に示されるとおり、本書はリカード研究といっても、『原理』第一章の価値論というきわめて限定された範囲のものであり、リカードの経済学者としての生涯にわたる広範囲の理論的活動（特に同時代の他の論者たちとの討論）に対する目配りも価値論研究の範

<sup>6</sup> これらはもちろん、スラッフアの全集版第六巻から第九巻までに収録されているものと比べればきわめて不完全なものである。

限に限定されている。また、『原理』に盛り込まれた彼の経済学体系についてもその全体に対して何らかの見通しを与えようとするものではない。本書はいわば一種の特殊専門研究のタイプに属するものである。

著者のピオジョは学位論文を元にした本書の刊行後、アカデミックなキャリアに入ることもなくまたその後には本書のテーマに関連する著書や論文を刊行することもなく、研究者の世界から離れた生涯を送った (Cf. Abraham-Froid, *Avant-propos*, p.v, note1)。このこともまた、彼女の著書が長く (とりわけフランスの学界で) 取り上げられることなく、忘却された理由の一つになったと思われる。本書は、『利潤論』から『原理』第三版にいたるまでのリカードの価値論の展開の跡を、上に名前の挙がっている同時代の諸論者たちとのやり取りにも配視しつつ、1930年代初めのころまでに利用可能な広い範囲の資料を駆使しつつ、文献解釈学的にフォローし、リカードの価値論の基本性格について一定の主張を打ち出すことを目指している。このような学史研究のスタイルは、少なくともリカードの経済理論にかんする限り、フランスの学界では後にも先にもほとんど他に例がないように思われる。むしろ、日本の学史研究やアングロサクソン系の一部のそれに近い手法と言ってよいのではないだろうか。このようなことが、ピオジョの著書がこれまで挙げたいくつかの要因とならんでこれまでフランスの学界で (とりわけ 1988 年の再刊まで) 取り上げられることがほとんどなかったもう一つの重要な要因をなしていると思われる。本書は、再刊されるまでフランスの学界からは忘れられていたし、1988 年までは事実上利用不可能な状態にあった、と再版の編者の Abraham-Froid は述べている (Cf. Do., p.v,vi)。

本書には一方でリカードの価値論を効用価値論から明確に区別しリカードの新古典派との相違を強調しようとする姿勢は見られるが、著者の主たる狙いはそれまでの主に英米両国で行われてきたリカード研究の中で通説的な地位を獲得していた J.H.Hollander や E.Cannan の説 (リカードの価値論は労働価値論。リカードは後年になるほどこの立場から後退していった) に対して、文献的な証拠に基いて異論を唱えることにあったと思われる。また本書の内容からして、労働価値論と剰余価値論を基礎にマルクスとの関係の中でリカードを学説史的に位置づけようとする研究スタンスは、著者には縁遠いものであったように思われる。巻末の文献目録にはマルクスやマルクス主義関係の著作物もいくらか挙がっているが、しかし、本文での議論にはこの系統の文献の影響やそれらに対する注意はほとんどないと言ってよい。ピオジョが本書のための研究に従事していた時期は日本でもようやく本格的な経済学史研究 (リカード研究を含む) が始まった時期と近いが、日本の学史研究の大きな部分がマルクス理論の影響の下にまたこれを基準として遂行されたのとは非常に異なっている。先に触れた日本の学史研究との近さはその文献解釈学的なスタイルにとどまるのである。

先にも触れたように、1930年代はリカード『全集』の刊行に向けてスラッフアによる資料収集・整理・検討・評価などの準備作業が始まったばかりの時代であり、当然のことながらその具体的成果は全く世には出ていなかった。ピオジョの本書のテーマにとりわけ深く関連するリカードの文書のうち、スラッフアの手によって 1950年代に入ってから初めて公表されたのは、『全集』第IV巻に収録されている「価値にかんするトレンズの見解についての諸断片」(1818年)と「絶



対価値と交換価値」(1823年)の二つである。これらの断片的なメモ・ノートと遺稿には、本書の中心論点についてのリカードの考えが他の諸資料にもましてはつきりと述べられており、筆者の見るところでは、これらの資料はビオジョが執筆に当たって利用しうることなく本書の中で打ち出した結論的主張に支持を与えうるものであると思われる。

リカードの理論には「労働価値論と生産費価値論との一時的な二元性」が見られるが、労働価値論は最終的には「ほとんど消滅」した(Biaujeaud, p.154)というのが、この結論的主張の中心である。ビオジョは労働価値論と生産費価値論とは異質な論理であり、前者はスミスの影響下にリカードの著作に一時的に持ち込まれたものだという。つまり、リカードの価値論は生産費価値論として『原理』を通じて一貫していたというのである。リカードの価値論を労働価値論と理解するのは、上記のJ.H.HollanderやE.Cannanも含めてむしろ19世紀以来の通説的・常識的なリカード解釈に属する。スラッフアはビオジョの本書に言及した注のすぐ後に次のように述べている。「こうして、リカードの立場は版を追うにつれて後退していったという見解が確立された。しかし、新しい証拠に照らしたテキスト上の変化の検討は、この見解に対して全く支持を与えない。すなわち、第三版の理論は本質的にも強調点においても、初版のそれと同一であると考えられるのである。」(Ricardo1951, Sraffa's *Introduction*, p.xxxviii)スラッフアのこの文言は、リカードが投下労働価値論において『原理』初版から第三版まで一貫していたということを主張しようとするものであり、同じく「一貫」といってもビオジョとはベクトルが異なる。リカード価値論の基本的な性格については、実はスラッフアも彼がこの文脈で批判しているHollanderやCannanと同じ理解を共有していることになる。

ビオジョの本書は、このような理解に対して異を唱えたマーシャルの解釈を、さらに掘り下げた文献的研究によって強固に主張しようとするものである。マーシャルは彼の『経済学原理』第五編への付録I「リカードの価値の理論」において、リカードが『原理』第三版の第一章第六節「不変の価値尺度について」(この節は第三版で初めて付加された)の最後の部分の脚注で述べた文言——「マルサス氏は、生産の費用と価値は同一であるというのが、私の説の一部であると考えているように思われる。氏のいう費用が、利潤を含む「生産費」であるならば、その通りである。」(Ricardo1951, p.47)——を引用して、リカードの価値論の基本性格を生産費論とすべきことを主張した<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> 日本語訳書で10ページ程度のこの付録Iは、リカードの価値論をはじめ明確に生産費価値論として性格づけたものとして関連文献で取り上げられることもあるが、マーシャル本人は——少なくともこの付録の中では——本文中で紹介したリカードからの引用文をもちだす以外には、自己の主張を根拠付けるために特に『原理』第一章「価値について」の理論内容に対して独自の分析を行っているわけではない。この付録のはじめにマーシャルはリカードの理論の全般について性格づけを行っているが、そこには、効用・限界量・商品の分類・収穫逓減・逓増等々といった、リカード以後に経済学的思考を支配するようになった諸概念・発想が実は実質的にはリカード自身の中にも存在していたとするなど、リカードをその後のミルや限界理論(そして自分自身の立場)に引き寄せすぎて読み込む顕著な傾向が見られる。上記の引用文に依拠したリカード価値論の性格付けもこのようなかなり強引な解釈枠組みの中で出されている。そして付録Iの後半では、前半でのマーシャルの理解を前提としてS.Jevons等のリカード解釈についての批判的吟味がなされている。付録Iに含まれるリカード経済学についてのマーシャルの解釈のうち、ビオジョの著書の主張が共有しているのはリカードの価値論を生産費価値論と解するという一点のみである。

トレنزのいわゆる資本価値論 (capital theory of value) —商品の価値の大きさはその生産に用いられた資本量に比例するのであって、その資本量によって用いられる (雇用される) 労働量に比例するのではない—は、彼の唯一の体系的な経済理論書である *Essay on the production of wealth*, 1821 の中で述べられているが、しかし、実質的に同一のアイデアは彼が 1818 年に匿名で発表したリカード価値論批判の論文 *Strictures on Mr. Ricardo's doctrine respecting exchangeable value* (*The Edinburgh Magazine*, Oct. 1818. 中村廣治訳、「トレنزのリカード価値論批判—紹介と若干の論評」、『大分大学経済論集』29 卷 3 号、1977 年) の中ですでに提示されていた。1821 年の著書でもこの論文からいくつかの箇所が取り入れられている。この論文が出た頃、リカードはちょうど『原理』第二版の改訂作業に取りかかろうとしていたところであった。トレنزの批判に接し、また彼との口頭での討論をもとに、リカードはこの時期にいくつかの抜粋・評注・短い草稿といった断片的な記録文書を残していた (現在これらは「価値にかんするトレنزの見解についての諸断片」として『全集』第四巻に収められている)。ピオジョは当然これらを参照することなく、トレنزの上記論文 (現物は入手できなかったようで、J.H.Hollander の編集・刊行したリカードの書簡集や小論文集の中のこの論文からの Hollander やリカードによる断片的・部分的引用によっている) および同時期のリカードの主としてマカロックに宛てた手紙を基礎として、トレنزの理論と彼の批判がリカードに大きなインパクトを与えたことを、『原理』第二版の改訂箇所によって具体的に明らかにしている。「リカードは耐久性の異なる諸資本の使用が原則に例外をもたらすことは確かに認める。しかし実際には、この例外と呼ばれるものは原則を覆す。なぜなら、耐久性の異なる諸資本の使用は例外的であるどころか、反対に、トレنزにとってみれば一般的に適用される規則なのである。他方、諸資本は、耐久性が同じだとしても、異なる労働諸量を動かさうが、それでも、同じ価値の商品を生産しうる。」(Biaujeaud, *ibid.*, p.95) 「トレنزの批判は結局のところリカードの信じるところと合致していたのである。」(*ibid.*, p.97) トレンズの「資本価値論」というのは投下資本量を費用と理解すれば費用価値論といってもよい<sup>8</sup>。事実リカードはトレنزの批判に対して有効な反論をすることができず、上記の「諸断片」を検討しても結局のところトレنزの見解に事実上の賛意を表明している。このことは、リカードの価値論にもともとから費用論的性格がそなわっていたからに他ならない (これは、1823 年の「遺稿」の中でリカードがトレنزの所説を検討した部分にもあてはまる)。

トレنزは上記のリカードへの批判の中で「流動資本の耐久性」という論点をリカードに突きつけた。初版においてリカードが耐久性を問題にしたのは彼の分類による固定資本についてだけであった。耐久的でないのが流動資本の特質と考えられたからである。しかし、第三版では同一の物的内容を持つ「流動資本」の用途による「耐久性」の相違が論じられ、リカードは事実上固定資本も流動資本ともに耐久性を持つことを認めた (Ricardo, *ibid.*, p.31. ただし、この問題にリカードが最初に気付いたことを示すのは、第二版に付された簡単だが重大な注記であった。

8 だが実際には、費用概念の中身はかなり複雑であって、このような言い方は第一次接近における単純化として受け取りうるのみである。

Cf. *ibid.*, p.52, note1)。このことは、両資本の区別の境界が曖昧になり結局は消滅するという結果に導いた。すべての資本部分を区別する唯一の要素は投下から回収までに要する時間の長さ一元化されていった（「遺稿」では「固定資本」という概念も消滅）。ビオジョはトレンズとのやり取りをきっかけにしたリカードの価値を巡る思考における「時間」の重要性を著書の各所で強調している。「価値の形成における時間という新しいファクターの介入は、労働と資本の共同的作用を非常に複雑なものにし、それゆえ、労働の生産費に対する関係を定義するのをかなり困難にした。」（*ibid.*, p.141）「価値における時間の役割がリカードの精神の中で重要性を増していった。」（*ibid.*, p.143）

このようにして、費用（労働量ではなく）とそれが拘束される時間（労働時間ではなく）とが、リカードの価値決定理論において決定的な役割を演ずるのであり、この意味でリカードの価値論は費用理論として性格付けられる。また、これと異質な労働価値論（これはスミスからの一時的な借り物に過ぎない）は、リカードの思考の最終段階（『マルサス評注』と『原理』第三版）では「ほとんど消滅」した。これが本書の結論である。

筆者も一定の保留の下にこれらの主張に大筋では賛同しうる。とりわけ、1930年代に利用しえた資料でもってこのような主張を展開できたことは評価に値するであろう。ただし、リカード価値論が当初より抱えていたとされる「二元性」は、筆者の見るところでは単なる見かけ上のものにすぎず、リカード価値論の基本性格は始めから終わりまで費用価値論として捉えることができ、この中に異質な「労働価値論」が混入していたのが最終的に排除されたということではない、と考えられる<sup>9</sup>。

## 二. 1990年代における「貨幣論的接近」によるリカードの貨幣理論の研究

Carlo Benetti, Jean Cartelier, Ghislain Deleplace の3名を中心とする「貨幣論的接近」を自称するグループは、1970年代の中葉に *Intervention en économie politique*（政治経済学への介入）と題する双書と *Cahiers d'économie politique* という不定期刊行誌を創刊し理論的活動を続けている（前者は80年代中葉に刊行停止、後者は現在も続刊）。当初はマルクスの資本主義理論の再構築のための作業の一環として、リカードの理論についても「価値と分配」にかかわる様々な領域について批判的な検討を重ねていた（例えば、Cartelier1976, Benetti-Cartelier1977, Deleplace1977）が、1980年頃を転機として古典派およびマルクスの「労働価値論と商品貨幣論」を棄却する「貨幣論的接近」に傾斜し、この視点から改めてマルクスや古典派（とりわけリカード）の理論に批判的検討を加える論考を発表し続けている。ここでは、彼らの80年代以降の研究のうち、リカードについて最も多く論じている Ghislain Deleplace の仕事（参考文献目録の当該項を参照）を取り上げ若干の検討をしてみたい。目録にリストアップしただけでもかなりの分量にのぼる彼の論著を逐一個別に論じるのではなく、これらを通じて全体と

<sup>9</sup> 筆者のリカード価値論解釈については、参考文献目録の竹永2000の「第一章 リカード価値論の問題構成」と「第二章 リカード価値論の基本性格——「価値修正」をめぐるトレンズ・マカロックとの討論を手がかりに——」を参照されたい。

して主張されている少数の論点を取り上げるにすぎない。

目録から分かるように当該論文の多くは90年代のものであるが、これには Marcuzzo-Roselli 1991 が大きく関連していると思われる。この共同研究の2名の著者たちはイタリアの大学に籍を置くイタリアの研究者であるが、フランスの上記グループとは以前から関係があり彼女らのリカード研究はこのグループからの影響を抜きには考えにくいように思われる。リカードの経済学における価値論と貨幣論の関連を問うという、それまでのリカード研究と比べて斬新な問題を設定したこの研究は、逆に、90年代前半の同グループおよびその周辺による新たなリカード研究を触発し、この時期のリカード貨幣理論への関心を惹起した。その目だった成果が *Cahiers d'économie politique*, No.23, 1994 のリカード特集であり、以下に簡単に紹介する Deleplace の諸論考を含むこのグループの一連の研究である<sup>10</sup>。

リカードは経済学者としてのキャリアを地金論争への介入をもって開始した。彼の通貨問題についての発言は、イングランド銀行による兌換の一時停止と物価の上昇・為替の下落という当時の状況をめぐる、時事的な性格の強いものであった。これに対して、資本主義経済の動きを一般的に解明することをめざす『原理』に繋がるリカードの理論的活動は、やや遅れて穀物法論争との関連で始められた。しかし、リカードは『原理』にかかわる研究と並行して貨幣問題についても生涯にわたり思考し発言し続けた。1816年の『経済的でしかも安定的な通貨のための提案』と『原理』初版の執筆は連続して行われた、また、死の直前の2つの遺稿「絶対価値と交換価値」と「国立銀行設立試案」は1823年の夏にほぼ同時に執筆された。この2つの例からだけでも、リカードが「価値と分配の理論」と「貨幣の理論」について同時並行的に思考し続けた<sup>11</sup>ことがうかがわれるであろう。これまで長い間のリカード経済学の研究は圧倒的に前者の領域に注意を向けてきたが、後者にかんしては「初期のリカード」の一時的な関心として捉えられることが多かった。リカードが生涯にわたって貨幣問題に関心を抱き続け発言を続けた、という事実が向けられること自体が少なかった。まして、リカードの理論的生涯の大部分にわたるこの二条の思考の関連を問うということは、ほとんど行われることがなかったと言ってよい。

上記の Marcuzzo-Roselli や Deleplace などによる90年代のリカード研究は、リカードの理論的活動のこのような次元に照明を当てようとするものである。そしてこのこと自体は、研究史上の新たな次元を切り拓いたものとして高く評価されるべきであろう。しかし、これらの研究では、概してリカードにおける「価値と分配の理論」は「実物的接近」として切り捨てられる傾向があり、彼の時事的パンフレットなどに盛り込まれた当時の通貨問題についての発言は、リカードにおける「貨幣的接近」として意識的に「実物的接近」と切断して独自の解釈と評価の対象と

---

<sup>10</sup> ただし、このようなリカード貨幣論への関心の集中は90年代とともに収束し、その後は Marcuzzo と Roselli も Deleplace も研究の重点を他に移している。なお、以上の概観からも分かるように、70年代からの彼らの研究は同じくフランスにおけるリカード研究といっても、前節で紹介したビオジョの研究とは何の関係もなく、これらの研究においてはビオジョの存在はまったく忘れ去られている。

<sup>11</sup> 全体としてはこのように「同時並行」であったが、リカードは『原理』第二十七章「通貨と銀行について」でだけは、例外的に「原理」の枠組みにおいて通貨問題を論じており、この章の分析はリカードの二つの思考経路がどのように関連付けられるのか付けられないのかを探る手がかりを与えられると思われる。

される。リカードの貨幣理論は「彼が価値の問題に接近する以前に〔強調は原文〕仕上げられており、リカードが価値の問題について後に行った扱いによって変更されていない。リカードにおける価値論と貨幣論がこのように分離されていたから、おそらく、価値についての激しい議論は貨幣の解釈に対して何らの作用も及ぼさなかったのである。このことにあまり驚いてはならない。なぜなら、価値論に貨幣を組み入れることが出来ないのは、リカードに限った弱点ではないからである。この弱点は、現代理論も含めて彼以後の経済思想の全体に見出されることなのである。」(Deleplace1999, p.92)「パティンキン(1956)〔『貨幣・利子および価格：貨幣理論と価値理論の統合』〕以来の言い方言えば、実物的分析と貨幣的分析のあいだの《二分法》がリカードにおいては完璧であり、この《二分法》を縮減しうるいかなる概念も存在しない。しかしまた、逆説的にも、この失敗こそがこの著者の「現代性」を際立たせてもいるのである。」(ibid., p.109)

このようなスタンスから、リカードにおける「実物的接近」は「貨幣的接近」の基礎ではありえないだけでなく、むしろ後者の展開にとっての障害として積極的な棄却の対象となり、前者のみが検討と評価の俎上に載せられる。

リカードの理論における貨幣は商品としての金とは端的に区別される非商品的存在であり、その価値は市場での金に対する購買力、つまり金の市場価格の逆数として示される。金は貨幣の価値を表示する「貨幣の標準」として機能するにすぎない。この貨幣の価値は貨幣の1単位が市場で支配することのできる金の物理的な量として表されるのであり、この貨幣の価値を安定化させる(金の公定価格の近傍に留める)ことが貨幣発行当局のなすべきことでありまたなしうることとされる。つまり、貨幣と地金との需給関係を発券銀行が前者ではなく後者の数量を調節する(金市場での売り買いを通じて)ことによって、貨幣の価値をターゲットゾーン内に保持するのである。しかしこのような「貨幣の価値」の安定は金という「貨幣の標準」の物理量との関係という次元での安定性であって、この金そのものの価値の安定とは無関係である。リカードが不変の価値尺度の探求という形で追求したのは、この一商品としての金の価値そのものの安定性という問題であったが、このような問題設定それ自体が「実物的接近」として退けられる。以上のようなことを「リカードの理論の正しい解釈」(Marcuzzo-Rosselli1994, p.1256)として提示するのは相当な無理があるが、「貨幣論的接近」を取る論者たちはほとんど意に介していないように思われる。一般に上記のグループの論者たちのリカード研究には、学史的文脈の中でのリカードの著作物のテキストに即した解釈を重視するよりも、自らの理論的立場をテキストの中に強引に読み込もうとする傾向が見られる<sup>12</sup>。

---

<sup>12</sup> 筆者も90年代の彼らの研究動向からインパクトを受け、リカードにおける価値の理論と貨幣の理論の関係を「労働価値説と貨幣数量説の見かけ上の矛盾」をどのように解消しようかという形で考察してみた。リカードの「価値と分配の理論」と「貨幣の理論」は完全に切断されているのではなく、彼の思考の中では両者は「かろうじて」リンクされていることを主張しようとした。竹永2000、第3章「リカードの貨幣理論——数量説と価値論——」を参照。

## 参考文献目錄

- Benetti, Carlo et Cartelier, Jean, Mesure invariable des valeurs et théorie ricardienne de la marchandise, in *Marx et l'économie politique Essai sur les «Théories sur la plus-value»*, Maspero, 1977
- Béraud, Alain, ch.XIII. Ricardo, Malthus, Say et les controverses de la «seconde génération», in Alain Béraud et Gilbert Faccarello (éds.), *Nouvelle histoire de la pensée économique, 1. Des scolastiques aux classiques*, La Découverte, 1992
- Biaujeaud, Huguette, *Essai sur la théorie ricardienne de la valeur*, Sirey, 1934 (réédition par Gilbert Abraham-Froid avec son Avant-propos, *Economica*, 1988)
- Cartelier, Jean, *Surproduit et reproduction* (Ch.VI, *Ricardo ou achèvement de l'économie politique*), Maspero, 1976
- Deleplace, Ghislain, Marx et le profit chez Ricardo (ou :critique de l'économie politique et critique du capitalisme), in *Marx et l'économie politique Essai sur les «Théories sur la plus-value»*, Maspero, 1977
- Deleplace, Ghislain, Sur quelques difficultés de la théorie de la monnaie-marchandise chez Ricardo et Marx, *Economie Appliquée*, tome XXXVIII, 1985, No.1
- Deleplace, Ghislain, Les différents usages de l'étalon monétaire, *Cahiers d'économie politique*, No.23, 1994
- Deleplace, Ghislain, Aux origines de la pensée monétaire moderne, *Revue économique*, No.5, septembre 1994
- Deleplace, Ghislain, Does circulation need a Money standard? In *Money in Motion The Post Keynesian and Circulation Approaches*, ed. by Ghislain Deleplace and Edward J. Nell, Macmillan, 1996
- Deleplace, Ghislain, Keynes et Ricardo sur la macroéconomie et la monnaie, *Cahiers d'économie politique*, No.30-31, 1998
- Deleplace, Ghislain, *Histoire de la pensée économique*, Dunod, 1999
- Deleplace, Ghislain, Does Ricardo's theory of money belong to the classical canon? In *Reflections on the Classical Canon in Economic Essays in honor of Samuel Hollander*, edited by Evelyn L. Forget and Sandra Peart, Routledge, 2001
- Faccarello, Gilbert, Sraffa versus Ricardo : the historical irrelevance of the 'corn-profit' model, *Economy and Society*, Vol.11, No.2, 1982
- Mahieu, François Régis, *Ricardo*, *Economica*, 1995
- Marcuzzo, Maria Cristina, Rosselli, Annalisa, *Ricardo and the gold standard, the foundations of the international monetary order* (tr. from Italian), St. Martin's Press, 1991
- Marcuzzo, Maria Cristina, Rosselli, Annalisa, Ricardo's theory of money matters, *Revue économique*, 45(5), 1994
- Ricardo, David, On the principles of political economy and taxation, in *The works and correspondence of*

- David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the collaboration of M.H.Dobb, Cambridge University Press, 1951
- Ricardo, David, *Valeur absolue, valeur d'échange*, traduit par Sylvie Denany et Patrick Maurisson, Amien, *Cahiers d'économie politique*, 1974
- Ricardo, David, *Essai sur les profits*, traduit par François-Régis Mahieu et Marie-France Jarret, Paris, *Economica*, 1988
- Ricardo, David, *Ecrits monétaires*, traduits sous la direction de Bernard Courbis et Jean-Michel Servet, Lyon, Association des amis du musée de l'imprimerie et de la banque, 1991
- Ricardo, David, *Des principes de l'économie politique et de l'impôt, édition anglaise de 1821*, traduit par Cécile Soudan et al., GF-Flammarion, Paris, 1992
- Vidonne, Paul, *La formation de la pensée économique*, *Economica*, 1986
- 喜多見洋、「転換期ジュネーヴの知識人たち：スイスの視点から見た西欧社会思想史の一齣」、大阪産業大学経済論集、第6巻3号、2005年
- 佐藤滋正、『リカードウ価格理論の研究』、八千代出版、2006年
- 竹永 進、『リカード経済学研究——価値と貨幣の理論——』、御茶ノ水書房、2000年
- マーシャル、附録I「リカードの価値の理論」、『経済学原理』第五編「需要、供給および価値の一般的関係」所収、永澤越郎訳第三分冊、岩波ブックサービスセンター、1985年

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題：日本のリカードウ研究史——比較史的視点を交えて——、課題番号：基盤研究 C:18530146）による研究成果の一部である。